京極 読書新聞 <第32号>

発行日 平成24年 4月 1日(日) 京極町生涯学習センター湧学館

古本市、大盛况!!

今年の古本市は、いつもの湧学館の除籍図書・雑誌に加えて、町内の小中学校から出た廃棄図書も合流しました。2月に町中で蔵書点検を行った成果です。ある意味、京極町全体の文化力を示すかのような古本市となりました。

結果がその文化力を雄弁に物語っています。なんと、ひきとられていった本、1166冊! 古本市始まって以来の数字です。3月23日、慶和園の皆さんに選んでもらって266冊。24日の古本市では、雑誌205冊、一般書505冊、児童書190冊の本が町の人にひきとられて行きました。古本市の本たち、第二の人生、がんばれよー!



湧学館作品展もピリッとアクセント

去年度より、「本の病院」の側で、製本教室で生まれた作品や、湧学館が手がけている郷土資料復刻本や、修理がなかなか上手くいった本などの展示を行っています。製本といい、本の修理といい、いろいろなことを行っているように見えますが、じつは、これらは別々の仕事なのではなく、同じ、本を愛する気持ちから出発した見え方のちがいにすぎないのです。要は、人の成長にとって必要な本が必要な時に読めることが重要なのであり、そのために、つくったり、なおしたりしているわけです。使っている技術は同じなんですよ。



すっかり定着した「本の病院」

今回も、古本市で絵本を選んだ後、その絵本を「本の病院」の方に持ってくるという事例が2件ありました。壊れていても、よい絵本、必要な児童書は「本の病院」で治せるから大丈夫…というのは、これは、なかなかうれしいことですね。頑張って治します。





製本教室の様子は3ページ目に掲載しています



湧学館の 『平家物語』 コレクションから (下)

〈『平家物語』を読む会〉講師 村山功一

『平家』関連本が続々入って、新刊書コーナや 『平家物語』コレクションコーナーに展示されています。その全部の内容を紹介することは出来ませんが、来館のついでに手にとって眺めてみてください。きっと読んでみたくなる〈『平家』本〉に出会うことと思います。

今回は以下の本を紹介し、このシリーズを終了いたします。

■『図説平清盛』 樋口州男·他/共著 289.1-タイ



コンパクトながら平清盛に関する基礎的知識が網羅されている。樋口州男(文学博士)氏を中心に、鈴木彰(文学博士)、錦昭江(文学博士)、野口華世(史学博士)の各氏が分担執筆した本格的な内容。「史実と伝承」を序章とし、I部「清盛の生涯」、II部「交響する清盛像一近世から近現代へ」という構成。特に、II部所収の、有名な"清盛木像(六波

羅蜜寺蔵)"を巡る記事は、興味深い。

本格的な内容ながら、豊富な図版・写真などを楽しみつつ清盛の生涯と、中世世界に触れると同時に、武士とは何かを考える「軍事貴族と京武者」など、《特論》《コラム》《人物》という"ミニ解説"にも、学ぶところが多い。

■『国宝平家納経』 小松茂美/著 702.1-コマ



小松茂美氏は、わが国"平家納経"研究の第一人者である。平家納経とは、清盛はじめ一門32名が、それぞれ一巻ずつの写経を、平家一門の信仰篤い厳島神社に奉納したものである。著者はたとえば、写経がなぜ寺院でなく神社に奉納されたのかなどの素朴な疑問も含め、この納経の持つさまざまな"謎"の解明に精力的に取り組んだ人である。

特に、古くから別人(書家)が書いたとされてきた清盛の署名がある「願文(奉納の趣旨を説明した文章)」を、清盛の自筆であることを明らかにした研究者として有名である。

当時の書家、絵師、工芸家が高度な技術を駆使し、最高級の材料を用い善美を極めた経本は、平家一門の信仰の篤さとともに、高い美意識を今に伝えている。本書では、願文はじめ全三十二巻をカラー写真で紹介している。この美しく荘厳な写真を鑑賞するだけでも十分に楽しめるが、後半に掲げられた著者の論考も一読してほしい。

■『西行と清盛』 五味文彦/著 911.1-ゴミ



たびたび名前が登場するので、すでにお馴染み、五味文彦氏の最新の著書。

佐藤義清(出家して西行)と平清盛は 同年の生まれである。一人は出家・遁世 し歌人として大成し、一人は位人身を極 める。大河ドラマ「平清盛」での清盛と義 清は、ともに院の北面に出仕する同僚の ように描かれているし、義清の出家の原 因を鳥羽上皇の妃、待賢門院璋子との

危ういロマンスの結果と描くが、史実はどうなのか。こうしたことも含め、二人の足跡を"時代を拓いた二人"という視点で検証するのが本書である。

著者は、同じ年生まれで共通点の多いこの二人が、政治と文化において後世に大きな影響をあたえた原因を解き明かすことを本書の目的とすると述べている。そこで、"比較人物史"ともいうべき方法を用い、新しい時代を拓いた両者の動きと特徴を探り出しつつ、西行の事蹟を考察した最新の"西行論"である。

多少専門的ではあるが、読み進めるうちに"史実を探るとはこういうことなのか"と、歴史を探究する愉しさを教えてくれる。現在多数刊行されている平家・清盛関連本とは趣を異にする、斬新な中世人物史となっている。

■『清盛と平家物語』 櫻井陽子/著 913.4-サク



本を開くと、豊富なイラスト、手書きの系図・年譜などが用いられた独特のレイアウトに惹きつけられる。もちろん、それだけではない。『平家』の中から有名な章段の原文を掲げ、丁寧な要約と解説を載せる。

著者は"生え抜き"の『平家』研究者であるだけに、ポイントをしっかりと押さえた構成と論述は、堅実ですぐれた『平家』入門書である。さらに、元NHK

アナウンサーである加賀美幸子氏の朗読CD(貸出可)が添えられており、プロの朗読による本文の鑑賞も楽しめる。









- ■『平家物語の舞台』 邦光史郎·百瀬明治/著 B913.4-クニ
- ■『平家巡礼』 上原まり/著 B913.4-ウェ
- ■『真説·平清盛「平家物語」の舞台を歩く』 三池純正/著 210.3-ミイ
- ■『平家かくれ里・写真紀行』 清永安雄/撮影 291.0-キヨ

以上は、いわゆる"紀行"本である。それぞれの著者の視点やアプローチの仕方は当然異なるが、いずれも『平家』をしっかりと読み込んだ著者たちが、『平家』の舞台となった土地を訪ね、人物の足跡を辿る。それは、単なる"旅行ガイド"ではない。それぞれの著者たちが目にし心に感じた感慨は、時空を超えて『平家』の世界に読む者を誘う。

製本教室、 無事終了!

今年度の製本教室は、3月3日(土)と17日(土)に行われました。準備段階を含めると作品完成までに2ヶ月くらいの時間がかかっています。それくらい、今年度作る本は高度な技術を要する本でした。

いや、一年間の時間がかかったと言った方が正確でしょうか。本が生まれるためには、技術やお金があればそれでOKというわけにはいきません。原稿が必要なのです。血の通った原稿が。そして、この原稿をまとめて、一冊の本として世に出したいと願う人の心が必要なのです。「平家物語 巻三~四」と「約束 峯崎ひさみ作品集」。どちらも、湧学館読書会の中で十数名の人たちに一年間読み継がれてきました。そういう大切な作品が一冊の本になることに意味があるのです。

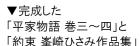
特に、「約束 峯崎ひさみ作品集」は、製本教室史上初めて、著者の峯崎さんにも一冊お贈りした本です。そして、峯崎さんの了解を得られましたので、湧学館蔵書としても受け入れることが決定。世界中で、湧学館にしかない一冊です。多くの人々に手にとってもらいたいと思います。京極町錦の中学生だった峯崎さんの姿も作品には登場してきます。ぜひ、今の京極の中学生にも読んでほしい。

できあがった作品は、3月24日「古本市」から29日まで、湧学館ロビーに展示発表しました。歴代の製本教室作品とともに、現在、湧学館で進めている昔の京極町史料の復刻版などと一緒に、テーブルの上いっぱい、とても賑やかな作品展となりました。



▼3月17日(土)

▲3月3日(土)







余談「平清盛」(3)

<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一(むらやま・こういち)

「ドラマ・清盛」も9回目(3/11)となりました。この回まで観てきて感じたことは、松山ケンイチ演じる清盛は"若き日の清盛"というより、その直情径行、大胆不敵な言動や異形と思える風貌から、若き日の織田信長か幕末の風雲児坂本龍馬的(もちろん、映画やテレビを通してのイメージですが)キャラクターのようだということでした。

幼少年期の清盛に関する史料はほとんどないので、その人物像は想像し創造するしかありません。そこで、日本人には馴染みの深い快男児、風雲児のイメージを借りたのではないでしょうか。その"決定打"ともいえる部分が第6回「西海の海賊王」に出てきます。

第6回は、海賊退治に向かった清盛が、色々なことがあって海賊と仲良くなってしまうという展開です。その中で清盛が〈……このおもしろうない世をおもしろう生きようと〉と言うシーンがありました。はて? どこかで聞いたような……と考えて、これか!と思い当たったのが、

《おもしろきこともなき世をおもしろく住みなすものは心なりけり》という一首です。これは、慶応3(1867)年に詠んだ高杉晋作の辞世(死に際して詠む歌)です。高杉晋作もまた、幕末を代表する風雲児です。戦国時代にケリをつけるべく活躍した信長や、動乱の幕末を彩る龍馬や晋作たちの豪快かつ爽やかなキャラクターを、若き清盛に与えたのではないでしょうか。どうも観ていて時代感覚が狂いそうになるのは、このせいかも知れま

せん。そういえば、一昨年の大河ドラマは「龍馬伝」でした。これも何となく影響しているかも知れません。

次に第9回「義清散る」で、気になったところをひとつ。

次期天皇をめぐる佐藤義清(のちの西行)との会話で清盛は 〈……あのようなお方(雅仁親王のちの後白河天皇)が治天の君となられれば、世は終わりじゃ〉と言います。しかし、雅仁親王が即位し天皇になっても"治天の君"ではありません。治天の君とは文字通り日本の最高権力者です。だから天皇=治天の君ということになりますが、院政が行われているこの時代の治天の君は天皇ではな〈院(上皇、出家すると法皇)なのです。第9回の舞台は保延5年であり、雅仁親王の父鳥羽上皇の院政期ですから、雅仁親王が天皇の位を得ても、直ちに治天の君とはなりえないのです。天皇となった雅仁親王が、後白河上皇として院政を開始し治天の君となるのは保元3(1158)年からであり、第9回の舞台となっている時代から数えて、19年後のことになります。

大河ドラマは教育番組ではないので、必ずしもすべて史実に 基づく必要はありません。

なので些細なことを細々とあげつらうのは、重箱の隅をつつく ようで不本意ではありますが「ドラマ・清盛」は、なかなかつつき がいのある作品でもあるわけです。

〈以下次号〉



▲「西行法師行状絵詞」 俵屋宗達·烏丸光弘作

[参考図書] * 印は湧学館所蔵 今まで掲げた参考図書と重複するものは除く

- *『辞世』(経営技術研究会/編, ぎょうせい)
- *『日本歴史大事典 2』(小学館)
- 『官職要解』

(和田英松/著,所功/校訂,講談社学術文庫)

発行

京極町生涯学習センター湧学館 〒044-0101 京極町字京極158番地1 TEL 0136-42-2700(代表) FAX 0136-42-2032 E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください http://lib-kyogoku.cubet.com/

